

Title	蜂妖考：『聊斎志異』異類譚札記(二)
Sub Title	Fairies of bee in Liaozhai Zhiyi
Author	八木, 章好(Yagi, Akiyoshi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2004
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.86, (2004. 6) ,p.30- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00860001-0030

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

蜂妖考

——『聊齋志異』異類譚札記(二)——

八木 章好

一

清・蒲松齡(一六四〇—一七一五)の怪異小説集『聊齋志異』には、狐妖・花妖をはじめ、さまざまな異類譚が含まれる。その中で、蜂妖を扱った作品として、「蓮花公主」(巻四)と「緑衣女」(巻四)の二篇がある^①。

作者手稿本(不分巻)においては、第一五〇篇「蓮花公主」の末尾を書き記した同じ葉にすぐ続けて第一五一篇「緑衣女」の篇題が記されていることから、この二篇がもと「蓮花公主」、「緑衣女」の順で並んで配置された作品であることは明らかであり、作者蒲松齡が両者を同じ題材の姉妹篇として意識的に併置していることが察せられる。康熙鈔本、『異史』鈔本、鑄雪齋鈔本など各種鈔本においても両篇が併置される状況は変わらず、また部門別に分類整理した乾隆年間の王金範刻本では、両篇を巻十八「妖二」に収め、共に「蜂」と副題を付している。

本稿では、まず歴代の詩文における蜂の形象を踏まえた上で「蓮花公主」と「緑衣女」を個々に赏析し、ついで両篇

の比較を試みながら、同じ題材を異なる色彩の文学作品に仕立て上げる作者の手法を考察し、『聊齋志異』の文学的特質の一斑を窺う。

二

「蜂」は、古くは「蠶」に作り、『説文解字』（十三下）の「蠶」の項に、

蠶は、飛蟲、人を蝥^さす者なり。

とある。『爾雅』の「釈虫」には、蜂の類として、「果蠃」「蒲廬」「土蠶」「木蠶」などの名称が見られる。

『詩経』小雅「小宛」に、

螟蛉有子

螟蛉^{めいれい} 子有れば

蜾蠃負之

蜾蠃^{から}之を負う

教诲爾子

爾^{なんじ}の子を教誨^{きやうかい}し

式穀似之

式^{もつ}て穀^よく之に似せしめん

とあるように、蜾蠃（「果蠃」に同じ。ジガバチ）は、螟蛉（苗を食う害虫。クワムシ）の子を背負つて巢に運び入れ、その子を教え諭して親である自分に似させたと考えられていた。生物学的事実としては、蜾蠃は螟蛉を捕まえ、刺して麻痺させるとその体内に卵を産み付け、孵化後は幼虫の餌とするのであるが、『説文解字』に「純^{すべ}て雄にして子無し」とあるように、古代中国人の俗信においては、蜂はすべて雄であり、自らに繁殖能力がないため、螟蛉を捕まえて自分の子として訓練し養育するとされていたのである。⁽²⁾

このように、蜂が自らとは類を異にし、しかも害虫である螟蛉を自分の後継者として育て上げるといふ俗信が、やがて儒家的な政治理念に結びつけられ、蜂のことを無知な民衆や野蛮な異民族を教化する為政者の模範とする觀念が生まれ、またその一方で、螟蛉が自らとは類を異にする蜂の子孫となつてその血統をつないでゆくことから、これを人倫關係に置き換え、螟蛉のことを親の事業を受け継ぐ孝行息子の喩えとする觀念が生まれた。科学的には誤謬であることが明らかになつた後も、中国ではこのアナロジーが儒家的政治觀・倫理觀を表象するレトリックとして根強く残る⁽³⁾。

また蜂の巢における組織的な群棲のさまは、しばしば儒家が理想とする人間社会の君臣關係や国家秩序になぞらえられる。唐・白居易の「閑園独賞」に、

蝶雙知伉儷　蝶双びて伉儷を知り

蜂分見君臣　蜂分れて君臣を見る

とあり、また『本草綱目』（卷三九）「蜜蜂」の項に、宋・王元之の「蜂記」を引いて、

嗚呼、王の毒無きは、君の徳に似たり。営巢すること台の如きは、国を建つるに似たり。子が復た王と為るは、分けて定むるに似たり。王を擁して行くは、主を衛るに似たり。王の在る所にて螫さざるは、法を遵るに似たり。王を失えば則ち潰れるは、義節を守るに似たり。取るに惟れ中を得たるは、什一にして税するに似たり。

と述べ、蜂王が毒針を持たないことを君子の徳治になぞらえ、巢の設営・継承を人間社会の国家建設、世襲の封建統治に比し、さらに蜂王と群蜂の關係を君主と臣下・人民の間の秩序立つた主従關係に喩えている。これは、コロニーとしての蜂の生態を人間社会の規範的モデルとして見立てた一例である。

このように、蜂は、伝統的儒家思想の立論における恰好の比喩として、専ら模範的、規範的に扱われてきたが、しか

し、実際の生活において人々と直接関わりを持つところから由来する蜂のイメージは決して肯定的なものではない。蜂が毒針を以て人を刺すことにその所以があることは言うまでもない。『説文解字』においても、蜂は「人を刺す飛虫」であることが第一義に挙げられおり、『国語』『晋語』九に、

蝻蟻蜂蜚ぜいぎほうたいも、皆能く人を害す、況んや君相をや。

とあり、『抱朴子』「至理」に、

呉越に禁呪の法有り、甚だ明驗有り、(中略)又能く虎豹及び蛇蜂を禁ず。

とあるように、蜂は、サソリ・虎・蛇などと並んで、凶悪で獰猛なものを喩え、また『史記』「楚世家」に、

商臣は、蜂目にして豺声、忍人なり。

とあるように、蜂の眼は、鋭い凶悍な人相をいう。

また蜂が群れをなして相手を攻めることから、蜂の群棲は軍隊に比されることも多く、梁・沈約「漢東流」に、

逆徒蜂聚　逆徒　蜂のごとく聚まり

旌旗紛蔽　旌旗　紛おほとして蔽う

とあるように、「蜂聚」「蜂屯」「蜂起」「蜂攘」などの語で人の集団を形容する時は、主に体制の脅威となる危険性をはらむ攻撃的な群衆や叛徒などを指している。

古来、蜂のイメージは肯定的なものと否定的なものに二分されるが、概して言えば、どの文化圏においても、蜂は人に危害を加える忌まわしい存在として否定的に扱われることの方が比較的が多いようである。⁽⁴⁾

続いて、文学作品における「蜂」の用例をさらにいくつか見ておこう。詩文における花鳥風月の一部としての蜂は、花と共に、特に果実や花蕊の蜜との関わりで歌われる。古代人にとって、蜂は総じて「蜂」であり、これを細かく類別する意識は希薄であつたようであるが、刺す蜂のイメージが主に「胡蜂」（すずめばち）の類に由来するものであるのに対して、詩文の中で歌われる蜂のイメージは主に蜜蜂に基づくものである。古くは、梁・簡文帝の「蜂」詩に、

逐風從泛漾 風を逐いて泛漾に従い

照日乍依微 日に照らされて乍ち依微たり

知君不留盼 君が留りゅう盼はんせざらんことを知り

銜花空自飛 花を銜くわえて空しく自ら飛ぶ

とあり、また唐・杜甫「敝廬遺興、奉寄嚴公」に、

野水平橋路 野水 橋路に平らかに

春沙映竹村 春沙 竹村に映ず

風輕粉蝶喜 風輕くして 粉蝶喜び

花暖蜜蜂喧 花暖かにして 蜜蜂喧かまひし

とあるように、陽光と微風を伴う春景の中で詠われる。

詩語としての「蜂」の字は、唐・元稹「春詞」に、

山翠湖光似欲流

山翠 湖光 流れんと欲するに似て

蜂聲鳥思卻堪愁

蜂聲 鳥思 却つて愁いに堪えんや

とあり、宋・王安石「憶昨詩、示諸外弟」に、

幽花媚草錯雜出

幽花 媚草 錯雜として出で

黃蜂白蝶參差飛

黃蜂 白蝶 參差として飛ぶ

とあるように、しばしば「鳥」や「蝶」と対で用いられ、また唐・韓愈「花鳥」(奉和虢州劉給事使君三堂新題二十一詠

其八)に、

蜂蝶去紛紛

蜂蝶 去りて紛紛たり

香風隔岸聞

香風 岸を隔てて聞く

とあるように、花の芳香と結びつけて歌われる。

このように、古典詩において、蜂は主に花や鳥や蝶と共に春の風物の一つとして詠われるが、女性との関わりで詠われる場合も少なくない。唐・李賀の「難忘曲」に、

蜂語繞妝鏡

蜂語 粧鏡を繞り

畫蛾學春碧

蛾を画いて春碧を学ぶ

とあるように、「蜂語」や「蜂声」は、閨房の女性に付随する一種の風物として詠われる。また「蜂腰」が女性の細い腰を表し、「蜂鬚」が女性のしなやかな頭髮を表すように、蜂の身体の一部が女性美を象徴する小道具として用いられる例は、宮体詩や閨怨詩などにしばしば見られる。なお、明代の戯曲には、蜂そのものを擬人化する用例が散見するが、

多くの場合、蜂と蝶の舞いを男女間の思慕や歎合に喩えたものである。^⑥

一方、志怪の類においては、『太平広記』（巻四七三～四七九）「昆虫」の部に蜂に関する話が数篇見られる。いずれも珍奇な蜂の種類を紹介するごく短い記述であるが、擬人化したものとしては、巻四七九に「蜂餘」と題する話が『稽神録』から採録されている。梗概は以下の通り。

科挙に赴く旅人がある老人の家に投宿する。そこには人が大勢いて、狭い部屋が百余間あった。空腹であることを告げると、珍しい甘美な食事を振る舞われる。寢床に就くと耳元でぶんぶんと言がする。夜が明け目を覚ますと、身は畑の中に横たわっており、傍らに大きな蜂の巣があった。旅人は中風を患っていたが、それ以来すっきり治ってしまった。

ここでは、一人の翁と大勢の客人が蜂の化身として現れ、蜂の巣を連想させる家屋の描写も見られる。しかし、話の焦点は蜂そのものにあるのではなく、むしろ蜂蜜が男の病を治癒した効能をいうところにある。蜂蜜が食用・薬用として珍重されたことは、晋・郭璞「蜜蜂賦」にすでに、

百藥須之以諧和　　百藥　之を須^{もち}いて以て諧和し

扁鵲得之而術良　　扁鵲^{へんじやく}　之を得て而して術良し

とあり、『本草綱目』（巻三九）「蜂蜜」の項に、

衆病を除き、百藥と和し、久しく服すれば、志を強くし身を軽くし、餓えず老いず、延年すること神仙のごとし。とあるように、不老長寿の万能薬とされる。「蜂餘」の話もこのような蜂蜜の靈的効能を説いたものである。

さて、『聊齋志異』に収録された蜂妖の話一篇を見ていくことにする。まず「蓮花公主」の梗概は以下の通り。

寶旭が昼寝をしていると使者が現れ、樓閣が幾重にも重なる別世界に招かれる。宮殿に入ると王様が出迎え、酒宴のさなか公主の蓮花と引き合わされる。寶はその類い稀な美しさに心を奪われ、王様が縁組をほのめかしたのを気づかぬまま家に帰り着くと、そこではつと目が覚める。ある夜、友人と榻を共にしていると、再び王様に召し出され、公主と婚姻を結ぶ。祝宴の翌朝、宮殿が蟒蛇の妖物に襲われ廢墟と化したとの知らせがくる。寶は公主を自分の家に連れ帰り難を逃れるが、公主は父母を思い泣き悲しむ。なだめることもできずに困惑するうち、ふと目が覚めると蜂が枕元を飛んでいる。寶は友人に夢のことを話し、蜂のために巢を作つてやると、塀の外から蜂が群れをなして集まってきた。蜂たちがやってきた方を尋ねていくと、隣の畑に古い蜂の巢があり、中に長さ一丈ばかりの蛇がいたので、これを捕まえて殺した。蜂は寶の家で盛んに増えたが、不思議なことは起こらなかった。

「蓮花公主」は、異類の話でありながら、かつ夢幻の別世界の話でもある。馮鎮巒評に、「大槐安国の後、又世界に闢ひらく」とあり、何守奇評にも、「蟻穴蜂房、後先に轍を一にす」とあるように、唐・李公佐の「南柯太守伝」を本事としていることは明白である。蟻と蜂は生物としての形態・習性に共通の点が多く、詩文においてもしばしば同義の比喻として扱われる。作中で、公主が寶の家に避難してきた時に発した言葉に、

此大安宅、勝故國多矣。

ここはとても安らかでいられるお家、もとのお国よりよっぽどましですわ。

とあるのも、淳于棼が迷い込んだ蟻の王国「大槐安国」に引っかけた洒落であろう。また最初に夢から覚める場面でも、
冀舊夢可以復尋、邯鄲路渺、悔嘆而已。

再び夢の中へと願ったが、邯鄲の夢路は遙か遠く、ただ悔いて嘆くばかりであった。

とあるのは、唐・沈既濟の「枕中記」に基づく表現である。ちなみに、主人公竇旭の「竇」は穴を意味する。「南柯太守伝」と「枕中記」では、夢幻の世界への入り口は、それぞれ槐の木穴、青磁の枕の穴という設定になっている。「旭」は朝日であり、夢から覚めることを暗示するものであろう。

なお、夢と蜂とを併せた故事としては、清・褚人獲『堅瓠秘集』（卷二）に「瘦腰郎君」と題して元・林坤『誠齋雜記』より引いた話が収録されている。女の夢に現れた男が実は蜂の化身で、のちに女が蜂蜜で富を得るという話であるが、こうした夢と蜂とを結びつける着想の背景には、空中を舞う蜂の姿に肉体を出入りする靈魂の働きを象徴させる遊魂信仰の影響があると考えられることも可能であろう。⁽⁸⁾

『聊齋志異』の異類譚に顕著な特色の一つは、作品全体に執拗なまでに次々と配置される異類暗示の表現にある。「蓮花公主」においても、女が蜂妖であることを暗示する表現が随所に見られる。以下にその例を挙げる。

・疊閣重樓、萬椽相接、曲折而行、覺萬戶千門、迥非人世。

樓閣が幾重にも重なり、無数の建物が連なっている中を曲がりくねりながら進むと、何千何万もの家や門があつて、到底この世のものとは思えなかつた。

ここは、無数の六角形の小部屋が密集する蜂の巣のさまを巧みに描写している場面である。「椽」は、たるき（屋根を支える斜めの横木）をいい、ここでは家屋・部屋全般を指すが、その原義から蜂の巣の六角形の斜線を連想させる文字

として効果的に用いられている。

・宮人女官往來甚夥。

宮女や女官たちの往來がおびただしい。

ここは、造巢・営巢・採蜜・育兒など全ての仕事を担う雌蜂（働き蜂）が密集し、せわしく動き回る巢のさまを描いている。下文に「俄に数十の宮女、公主を擁して出ずるを見る」云々とあるのも、大勢の雌蜂が女王蜂を護衛するよう常にその周りを取り囲むさまを連想させるものである。

・酒數行、笙歌作於下、鉦鼓不鳴、音聲幽細。

幾度か杯が回るうち、笙の音と歌声が階下から聞こえてきた。鉦や太鼓を鳴らすことはなく、優雅で繊細な音色だった。

王国の宮殿での音楽は、笙の音と歌声のみで構成されている。銅鑼や太鼓のような打楽器を鳴らさないのは、蜂の羽音のイメージにそぐわないためである。

・洞房温清、窮極芳賦。

新婚の閨は、温かくもまた清々しく、何ともかくわしくしっとりとしていた。

「洞房」は、字面からも閉鎖的な印象を与える語であり、蜂の巢の閉鎖的なイメージと重なり合う。李賀「謝秀才有妾縞練改從於人、秀才引留之不得、後生感憶、座人製詩嘲諷、賀復繼四首」（其三）に、「洞房 思た禁たえず、蜂子 花心なを作す」とある。「温清」は、温暖かつ清涼なさま。ここでは、新婚の閨が暑くも寒くもない適温に保たれていることをいうが、これは、巢の内部の空調管理にたけた蜂の習性を意識した用語である。蜜蜂は幼虫の発育に適した温度を

維持するために、巢温が下がると雌蜂が胸の飛翔筋を振動させて運動熱を発生させ、一方、巢温が上がると水を採取してきて巢内に薄く撒いて打ち水をし、一斉に翅で扇いで温度を下げる。「芳賦」は、嗅覚と触覚の双方から蜂の巢をイメージさせる。芳香の描写は、上文にも「佩環はいかんの声近く、蘭麝らんじやの香濃くなれば、則ち公主至れり」とある。「賦」の字は、唐・朱慶餘の「題薔薇花」に、「粉は蜂鬚はちすに著つきて賦ならかに、光は蝶翅に凝りて明らかなり」とあるように、蜂の持つ感触を直感的に形容する。

・公主方與左右抱首哀鳴。

公主は側近の者たちと頭を抱えて悲しげに泣いていた。

蓮花の泣き悲しむさまを描くのに、「泣」や「哭」などを用いず、ことさら「鳴」を用いるのは、女を異類として捉えた表現とみてよいであろう。「哀鳴」は、主に鳥や獣の悲しげな鳴き声をいう。⁽¹⁰⁾

・然妾従君來、父母何依。請別筑一舍、當舉國相從。

でも、私があなたについて来てしまつたら、父上母上は誰に頼つたらよいのでしょうか。どうか別に一棟建ててください。きっと国中の者がついてまいることでしょう。

蜜蜂の場合、一番早く産まれた雌の子蜂が生長して女王蜂になると、元の女王蜂は若干の働き蜂を従え、旧巢を捨てて他に新たな巢を造る。父母のために別棟を用意してほしいというのは、こうした蜂の生態を意識したものであろう。なお、「蓮花公主」において、国王は蓮花の父すなわち男性の国王として描かれているが、蜂王は雌であるという生物学的認識が一般常識となるのが中国ではいつ頃からのことかは定かでない。⁽¹¹⁾

五

もう一方の蜂妖の故事「緑衣女」は、やや異なる色彩を呈する。梗概は以下の通り。

書生の于璟が寺にこもって勉強していると、ある夜、緑色の服を着た女が入ってきた。于は人間ではなからうと感づいたが、その美しさに心をひかれるまま、夜毎に訪れる女と親密に交わる。女が音楽に精通していることを知った于は歌を所望する。女はためらうが、于の熱意に負けて歌を歌う。歌い終わると、女はしきりに外を気にし、胸騒ぎがすると訴える。夜が明けて、女は于に見送りを頼んで帰っていった。于が部屋に戻ろうとした時、女の悲鳴が聞こえ、駆けつけてみると、軒下で緑色の蜂が蜘蛛に捕らえられている。于が救い出して机の上に置くと、蜂は硯の墨汁に身を浸し、「謝」の字を書き残して、いずともなく飛び去った。

夜が更けて女子禁制の寺に美女が訪ねてくるという設定は、志怪において狐狸の類が登場する常套であるが、さらに男の方はこれが人間ではあるまいと知りつつも女と深い関係を持つところは、『聊斎志異』の異類譚に共通した展開である。

朱一玄編『聊斎志異資料匯編』（中州古籍出版社、一九八五年）は、「緑衣女」の本事の一つとして前掲『堅瓠秘集』（卷二）から、「芭蕉女子」と題する故事を挙げている。明・陸燾『庚巳編』より引いた話で、以下のような内容である。書生の馮漢が、夏の晩、書斎にいと、窓の外に緑の衣装をまとった絶世の美女が立っている。女は焦氏と名乗り、部屋に入ってきた。書生は女が人ではないと疑い、衣を引くと女は袴の端を断ち切って去った。手の中を見るとそれは芭蕉の葉であり、庭の樹上のもとと切れ目がぴったりと符合した。

焦氏と名乗る「緑衣翠裳」の女が実は芭蕉の化身であつたという話である。昆虫の蜂と植物の芭蕉という大きな違いもあり、「緑衣女」が直接これに基づいて書かれたとは考えにくい。しかしながら、細部において同じ表現やプロットを用いて似通った趣を醸し出しており、異類譚としての傾向は軌を一にするものと認めてよいであろう。

「緑衣女」においてもまた「蓮花公主」と同様、全篇にわたって異類暗示の表現がちりばめられている。以下に例を挙げる。

・ 于驚起、視之、綠衣長裙、婉妙無比。

于が驚いて立ち上がり、よく見れば、緑色の着物に長い袴を身にまとい、この世に二人としない美しさであつた。

「緑衣」は、実際の色彩であれ、あるいは象徴的な色彩であれ、蜂の体色を示す。物語の最後に女が「緑蜂」であることを明かすが、蜂の種類については未詳。「長裙」は、かかとまで垂れる長いスカートで、蜂の羽を表している。

・ 羅襦既解、腰細殆不盈掬。更籌方盡、翩然遂出。

薄絹の肌着を脱ぐと、その腰の細さは左右の掌で囲んでも余るほどだった。夜が明けかかると、飄然と立ち去った。くびれたように細い腰は、蜂の形態的特徴の一つである。土蜂（地中に巣を作る蜂）の別名を「細腰」という。また美しい女性の細い腰を「蜂腰」と呼ぶ。「翩然」は、ヒラヒラと翻るさまをいい、蜂が風に揺られながら軽快に飛ぶ姿を連想させる。唐・李商隱の「蜂」詩に、「宓妃^{みき} 腰細きこと纔かに露に勝え^た、趙后 身軽きこと風に倚らんと欲す」とあり、蜂の腰の細さと身の軽さを歌う。

・ 聲細如營、裁可辨認、而靜聽之、宛轉滑烈、動耳搖心。

その声は蠅の羽音のようにか細く、耳をそばだててやっと聞き取れるほどだったが、静かに聞くと、ゆるやかに抑

揚する滑らかで澄んだ音色は、耳にしみ入り心を揺さぶった。

上文にも、「卿が声嬌細なり」、「但だ只微声もて意をさせば可ならんのみ」などであり、女の声の弱々しさ、繊細さが強調されているが、これらはいずれも低く小さい蜂の羽音に由来するものである。

・歌已、啓門窺曰、「妨窗外有人。」繞屋周視、乃入。

歌い終えると、戸を開いて外を窺い、「窓の外で誰かに聞かれたら大変だわ」と言つて、部屋をのりをぐるりと回つてよく見てから帰つてきた。

女が部屋の周囲を一回りして確かめるさまは、蜂が敵を警戒して巣の周辺をぐるぐる旋回して飛ぶ様子を思わせる。

「緑衣女」は、『聊齋志異』の異類譚の中でもとりわけ筆の冴えた一篇である。但明倫評にも、

色を写し声を写し、形を写し神を写すに、俱に蜂に従い曲曲として絵き出す。(中略)短篇の中に賦物の妙を具う。とあるように、姿形から風韻まで蜂の属性・習性に沿つて細やかに生き生きと描かれている。異類暗示の描写が重ねられるにつれ、読者は女が異類であると気づき、動植物の種類も容易に特定できるように仕組まれている。知らないのは主人公の男だけであり、作品の最後ではじめて異類であつたことが明かされる。ちょうど芝居で観衆のやきもきする心情を煽るような舞台的效果が計算されているのである。

蜂を可憐な女性として描いた文学作品は、『聊齋志異』以前に例を見ない。作者の目は専らその小ささ、か弱さに注がれており、「人を刺す飛虫」という蜂の第一義的な性格は完全にふり落とされている。方舒嚴評には、

此(「緑衣女」と蓮主(「蓮花公主」)を觀るに、悉く溫柔にして喜ぶべし。覺うに「予并蜂して自ら辛螫を求むること莫し」とは、詩人翻つて過慮を為すなりと。

とあり、『詩經』から周頌「小毖」篇を引いて、むやみに手を出すと災禍を招く危険で恐ろしいものという古来からの蜂に対する人々の固定観念を提示し、それを逆手にとつて、「蓮花公主」や「緑衣女」の蜂妖がそうした固定観念に反する溫柔なものであることを述べている。これは、『聊齋志異』の他の異類譚において、例えば「阿織」（巻七）が、誰もが忌み嫌うはずの鼠をしおらしい愛すべき女性として描いているのと一脈通じる着想である。

さて、「緑衣女」でもう一つ際立つのは、意図的に強調された男の性格描写である。于生は、寺の一室を借りて勉強に勤しむ科擧の受験生であり、うぶで世故に疎い男として描かれている。「于」という姓を用いているのは、おそらく任意のものではなく、「迂闊」「迂遠」「迂拙」などの「迂」を連想させる文字として意図的に選んだものであろう。于生は女心のわからない鈍い男であり、女の方が繊細可憐で細やかな情を持ち、しかも機知に富む賢さを持っているように描かれているのとは対照をなす。

既而就寝、惕然不喜、曰、「生平之分、殆止此乎。」于急問之、女曰、「妾心動、妾祿盡矣。」于慰之曰、「心動眼瞶、蓋是常也、何遽此云。」

やがて床に入ったが、女は落ち着かない様子で、「あなたとのお付き合いももう終わりだわ」と言う。于が慌てて問うと、「胸騒ぎがするのです。私の寿命もこれまでだわ」と言うので、于は慰めて言った。「心臓がドキドキしたり目がピクピクしたりするのはよくあることだよ。どうしてそんなこと言うのさ」

ここでは、「心動く」という語を女は心理的な意味に用いて切羽詰まった状況を訴えているのに、男は生理的な意味に解してしまう。異類の女を相手にする男にこのようなうぶで世故に疎い性格を与えるのは、情の純真さを表すためのものであり、『聊齋志異』の異類譚に共通している。

『聊齋志異』の異類譚が他の志怪のそれと一線を画す所以は、人間の女性として描いても異類としての特性を失わず、また異類として描いても人間の女性としての風趣を失わない筆の妙にある。「蓮花公主」と「緑衣女」においても、蜂としての属性と人間としての風情が綯い交ぜになった女性の形象が読者を夢幻と現実の交錯する妖しい世界へと誘うのである。

「蓮花公主」と「緑衣女」は同じく蜂妖を扱った作品であるが、実は文学作品としての色彩や異類の捉え方、描き方に根本的な差異が認められる。「蓮花公主」と「緑衣女」の間の大きな違いは、まずその舞台設定にある。「蓮花公主」においては、人間の男が異類の世界かつまた夢幻の世界に入っていく。非現実的な別世界での話であるので、作者は志怪の伝統的素材を存分に生かし、蜂巢と夢幻のモチーフに加えてさらに仙界のモチーフをもオーバーラップさせている。⁽¹³⁾これに対して「緑衣女」では、逆に異類の女性が人間界に姿を現し、人間の男と刹那の浪漫を展開する。蜂の生物としての特性の一つは、家族を構成し、巢全体がカースト社会の共同体（コロニー）として機能することにある。「蓮花公主」においてはそうした特性の反映が明白に伺えるが、「緑衣女」にはそれが全くない。つまり、蓮花は群れの中に属する一構成員として描かれるのに対して、緑衣の女は名もない一個の可憐な女性として描かれ、背後にあるはずの群れの存在を感じさせない。自然界において群棲する生物が群れを離れた時の孤独と無力を考え併せると、独りで現れる蜂妖の辿る運命は容易に予測できるものであり、書生の情愛と庇護を求める姿はひとときわ可憐さを増幅させるものとなろう。

舞台設定の違いは、そのまま異類を描く筆致の違いにもつながっている。「蓮花公主」は蜂の王国で起きた出来事を

語ることが主体であり、蜂妖としての蓮花の描写にはそれほど重点が置かれていない。それに比べて、「緑衣女」の方は、蜂妖そのものの描写に力点があり、異類でありながら人間的な情が細やかに描かれ、人間の女性としての体温を感じさせる描写になっている。

物語そのものは「蓮花公主」の方が長く複雑で、紆余曲折・起伏変化に富み、文体も美文調で修辭的に凝ったものとなっている。しかしながら、性格描写・心理描写に注目すれば、「緑衣女」の方がより緻密で詩情豊かに描かれており、志怪の旧套を一步抜け出た文学作品に昇華されている。実は、これと同様のことが、牡丹の精を扱った二つの作品「葛巾」(卷七)と「香玉」(卷八)についても認められる。⁽¹⁴⁾ 文学作品としての質的な優劣を問うべき問題ではないが、ある意味で、「緑衣女」や「香玉」の方が、より「聊齋」的に完成された作品、より文学的に洗練された作品と評してよいかもしれない。

「蓮花公主」と「緑衣女」は同じ巻に並んで収録されている。蒲松齡は同じ題材の作品を同じ場所に並べるに当たり、意図的に両者の文学的手法に違いを持たせ、同じ蜂妖に対して異なる趣を与え、作品の仕上がりに変化を加えているのである。五百篇に及ぶ作品が決して千篇一律ではない。そこに蒲松齡の文人としての非凡な才があり、『聊齋志異』が他の志怪の追隨を許さない所以がある。蜂妖を描いたこの二篇が、「蓮花公主」、「緑衣女」の順で執筆されたであろうことはほぼ間違いない。伝統的手法を踏襲しながら旧来の志怪伝奇を換骨奪胎した前者を書き終えたそのすぐ後に、今度はさらに情の描写に力を入れて新しい独自の境地を開く後者へと筆を進めていった蒲松齡の創作工房を我々は垣間見ることができるのである。

- (1) 本論中の『聊齋志異』の巻次は、任篤行輯校『全校会注集評聊齋志異』（齐鲁書社、二〇〇〇年）に従う。
- (2) 呉・陸璣『毛詩草木鳥獸虫魚疏』に、「螟蛉者、桑上小青蟲也。似步屈、其色青而細小、或在草葉上。蜾蠃、土蜂也。一名蒲盧。似蜂而小腰、故許慎云細腰也。取桑蟲負之於木空中、或書簡筆筒中、七日而化爲其子。里語曰、呪云、象我、象我」とある。
- (3) 唐・敬括「蒲盧賦」に、「究政化之所歸、於蒲盧而可見。負么麼之異族、能教誨而知變。大鈞所播、各異稟而殊方、二氣相生、遂改形而革面」とあり、また宋・歐陽修「螟蛉賦」の序文に、「嗟夫、螟蛉一蟲爾、非有心於孝義也、能以非類繼之爲子、羽毛形性不相異也。今夫爲人父母生之、養育劬勞、非爲異類也、乃有不能繼其父之業者。儒家之子卒爲商、世家之子卒爲皁隸。嗚呼、所謂螟蛉之不若也」とある。
- (4) 日本の俗信では、蜂が家に巢を造ると縁起がよいとされる場合（商売繁盛など）と災難が起こる前兆として忌まれる場合（破産・戦禍など）とがある。古代ギリシャの『イソップ物語』に出てくる蜜蜂は悪役であり、またインドでは、増えすぎた人口を減らすために神が蜜蜂の腹の中に「死」を入れて大勢の人々の住む村へ送りこむという民話がある。（小西正泰『虫の文化誌』朝日新聞社、八九〜九一頁）
- (5) 唐・皇甫松「拋球案」詞に、「帶翻金孔雀、香滿繡蜂腰」、唐・王建「宮詞」其四に、「蜂鬚蟬翅薄鬆鬆、浮動搔頭似有風」などがある。
- (6) 明・高明「琵琶記・丞相教女」に、「絳羅深護奇葩小、不許蜂迷蝶猜」、明・王玉峰「焚香記・允諧」に、「那淫奔塢、多少蜂狂蝶亂、畢竟傍誰虛度」、明・徐復祚「投梭記・鬻女」に、「敢還是年少多情、蜂猜蝶戲、穴隙踰牆被人話」などがある。
- (7) 唐・杜甫「青絲」に、「不聞漢主放妃嬪、近靜潼關掃蜂蟻」、唐・白居易「郡中春宴、因贈諸客」に、「蜂巢與蟻穴、隨分有君臣」などがある。
- (8) 北方ユーラシアには、人間の靈魂が蜂の姿になって飛び出すという言い伝えが広く分布する。また日本の民話にも、眠っている男の鼻から飛び出した蜂の教えで黄金のありかを発見するという所謂「夢買長者」の話がある。
- (9) 手稿本・康熙鈔本などは「溫清」に作る。張友鶴輯校本・任篤行輯校本では「清」を「清」に改めている。『札記』「曲

礼」に「冬温而夏清」とある。

- (10) 『詩経』小雅「鴻雁」に、「鴻雁于飛、哀鳴嗷嗷」、晋・傅玄「擬四愁詩」に、「驚馬哀鳴慙不馳、何爲多念徒自虧」などがある。

- (11) 元・戴表元の「義蜂行」に、「一朝大蜂出不戒、春容靚飾修且姱」とあり、ここで「大蜂」（蜂王を指す）は下句の表現から明らかに女性（雌）として描かれている。明・李時珍『本草綱目』、明・徐光啓『農政全書』などには蜂王の雌雄に関する記載はない。なお、西欧では十七世紀までは、蜂王は雌ではなく雄の蜂だと信じられていた。（大修館書店『動物シンボル事典』「みつばち」の項、三四一頁）

- (12) 拙稿「牡丹考」（『藝文研究』第六五号、一九九四年）三二五頁。

- (13) 作中に「二女官至」とあるが、仙界遊行譚では、多くの場合、仙界で人間の男を迎えるのは二人の仙女である。また「寶郎来乎」というセリフも、仙界の者が人間が迷い込んでくることを予知して名前までもわかっているという常套を用いたものである。

- (14) 前掲拙稿「牡丹考」参照。